

SE 観客の完成が鳴り響く

司会者の声が聞こえる

「イントリーナンバー8番、2MN 曲は立ち上げれます。

明転

中嶋とマーが二人で立っている

曲のイントロが流れ、中嶋歌い始める

隣でマーが緊張した様子でリズムに乗っている、動きが少し固い

Somebody say 立ち上がるんだ 胸にその思い抱っこし

Everyday 燃え尽きるまで その身を粉にこぼし

Nobody knows つかみ取るんだ 新しい自分を

By the way 立ち止まらずに べっぴんもすすむと

輝き放つ 未来はすぐそこ

昨日までの苦しみや 悲しみ忘れ お前迎えにいっくぜ

戻ってこいよ どこか知らない世界(くに)で涙流すなら

戻ってこいよ 長く険しい道が 待ち構えても 俺が守ってやるから

いよいよマーのラップの部分である

しかしあまりの緊張のせい、ラップの歌詞を全て忘れた模様である

しかたなくすべてラップでラップを歌いきるマー

中嶋びっくりした表情でマーを観る

ラップの部分が終わり歌に戻るのだが、マーが忘れたのに引きずられるかのように

中嶋も歌詞を忘れて、残りの歌を全てラップで歌いきる

暗転

明転すると元の部屋である

落胆した様子で部屋に戻って来る中嶋とマー

しばらく黙ったままの二人

この状況に耐えられない中嶋が酒を飲み始める

中嶋「マークくんも飲むか？」

マー「……………」

中嶋「何だよ、そんなに落ち込むなって」

マー「……………ごめん」

中嶋「気にするなよ」

マー「台無しだね」

中嶋「……………」

マー「俺が調子に乗ってやらせてくれなんて言ったから、ミッチちゃんの言う通り素人が簡単にできる事じゃないんだね」

中嶋「もう終わった事だよ」

マー「全部ラララなんてあり得ないよね」

中嶋「お前がさだまさしさんならあったけどな」

マー「ミッチちゃんの人生を俺が奪ったみたいなものな」

中嶋「最初からこの話は無かったって事にすれば良いんだから気にするな」

マー「ホントごめん」

中嶋「もう謝るなって、むしろ礼を言いたいぐらいだ」

マー「……………」

中嶋「あのオーディションのおかげで娘と再開できた訳だしな。」

マー「娘さんは何て言っていました？」

中嶋「まあ結果は残念な事になると思うけど、またライブをやるなら絶対見に行くねという約束してくれた。パパの歌も久しぶりに聴けたしうれしかったとな……しかも次は康世も連れて来ると言う約束までできた訳だし。俺の人生はこれからだ。これを機にまたじゅんじゅんいろんなところで歌いまくって康世とこずえを取り戻す！そしてまた三人で仲良くくらす」

マー「そうか、よかったね……………」

中嶋「まあな……………」

マー「よっ！お父さんなんてね！」

中嶋すこしてれる

中嶋「やめてくれよ恥ずかしい、」

マー「よっ、パパさんかっこいいよー！」

中嶋「そのパパって言うのはもっと照れるだろ！」

マー「ねーパパさん、怒らないで聞いてくれるかな？」

中嶋「なんだよ」

マー「その、娘さんの事なんだけごき……」

中嶋「なんだよ？娘がどうかしたか？」

マー「イヤー、その……」

中嶋「なんだよ……」

マー「じつは俺知ってるんだよね？」

中嶋「ん？」

マー「そのー」

中嶋「知ってるんって何だよ？」

マー「いや、俺の職場にね……その、事務のアルバイトに来ててね」

中嶋「ん？お前まさか？付き合ってるとかさう言う事言っんじゃないだろうっな？」

マー「……」

中嶋「おいーそのまさかかよー！」

マー「……まさかです。」

中嶋「え~~~~、うそ~~~~っ？マジで？」

マー「マジです。」

中嶋「おい、やめてくれよ、なんだよ！何でそんな事になるんだよ」

マー「俺もはじめはミツちゃんの子供何て知らなかったですよ！ここに引っ越して来てしばらく経ったときかな、俺インフルエンザで寝込んだんですよ。そのとき看病に来てくれて……飯作ってくれたりするときですわ……隣からミツちゃんの歌声が聞こえて来たんですよ。その歌聞いてあれっ？私この歌知ってる！これ私の歌だ、パパが私のために作ってくれた歌だって。」

中嶋「……」

マー「ほら、あなたが産まれた朝〜って歌有るでしょ？ミツちゃんあの歌歌ってたんです。」

その歌聞いて、私が産まれたときに作ってくれた歌だって、この歌知ってるのは私とパパとママだけだって！もしかしたら隣に住んでるのパパかもしれないって」

中嶋「……」

マー「泣きながら、何度も何度もいうんです。久しぶりに聴けた、やっと見つけた！ってね、それからはちよくちよくこの家に来てミツちゃんの歌聴いてたんです。」

中嶋「何で訪ねてこなかったんだ？」

マー「俺もいったんですよ、せっかくなんだから隣にいつて挨拶してきなよって……でもね、いけないって、もう何年も会ってないし、今まで一度も連絡してないのねいきなり訪ねるなんてできないよって、どんな顔して会えば良いのか解らないしって……それ以来何か有るところに来て隣でミッチちゃんの歌を聴いてたという訳です。あっ、奥さんも一度来ました。」

中嶋「康世もー！」

マー「奥さんすごくうれしそうな顔してましたよ。やっぱり歌は続けてくれてたんだって」

中嶋「……」

マー「奥さんも、こずえも未だにミッチちゃんの事愛してるんですよ」

中嶋「愛か……ひとつ聞いていいか？」

マー「はぁー」

中嶋「あいつらなんでもうちを出て行ったんだ？」

マー「……さーなんででしょうね？すみませんそこら編の事は僕もきいてません。」

中嶋「そうか……」

マー「でもね、俺思ってますよ、ミッチちゃんがまた昔みたいに、しっかり歌を歌ってみんなに
勇気や希望を与えられるようになったら、また家族でなかよくくらせるようになるんじゃないかなって。実際ミッチちゃんのステージを観に来てくれたんだし……
次はママもつれて来るなって事はさ、前向きに考えて良いんじゃないかなってね。」

中嶋「……」

つぎの問

中嶋「なーマー君、そのく、これも何かの縁だし、もしよかったらこれからも一緒にやらない

か？俺の歌とマー君のラップで……」

マー「えっ？」

中嶋「うん、一緒にやろう、俺もマー君から若者の考えや思いを聞けるからさ、それにマー君と一緒だとなんかやる気が出て来るんだよねー！」

マー「いや、俺は無理ですよーラララですよー！」

中嶋「大丈夫だよ！俺だってラララは経験してるーあんな事は長い人生でそうしよっちゅう有る

もんじゃないー！」

マー「いやでも……」

中嶋「なんだよ！お前こずえと付き合ってるんだろ？彼女の父親の頼みが聞けないのかよ！」
マ―「うん……」

中嶋「いいか、俺とマークくんが一緒にやるという事はだよ、こずえにとってみたら『最高の組み合わせじゃないかよ！』」

マ―「……」

中嶋「頼むよ！」

マ―「まーお父さんがそこまで言うなら……」

中嶋「ちよつとまって、お前にお父さんと呼ばれるのはまだ抵抗がある！」

マ―「解りました。やってみますか」

中嶋「よし、そうと決まれば早速新曲を作ろう。」

マ―「ですね、大切な人のために最高の歌を作りましょう！」

中嶋「おー！」

マ―「頼みますよーおじいちゃん！」

中嶋「ん？……」

マ―「……」

中嶋「お前まさか？……」

マ―「はいー！」

暗転

終わり！